

ペン俳句会 句会報(三三八号)

令和四年十一月四日(金)

晴天、日比谷公園にて吟行を行う。  
日本倶楽部で昼食会、句評会へ。

首藤 しずを  
晩秋のフィナーレいそぐ街の木々  
噴き上ぐる水に紅葉の色囃す  
朝の日に桜紅葉の葉裏透く

大津 そうかい  
望郷の埴輪二体の秋思かな  
秋麗や水面のゆらぎ樹の幹へ  
杜鵑草松本楼のカレーの香

安藤 晃二  
噴水の園まもりいる冬隣  
石垣の旧きに挑む鳶紅葉  
GHG 黄葉の映り水鳥浮く

宮原 凧  
心字池点字プレートなぞる秋  
銀杏の実落ちて生継ぐ命かな  
風立ちぬ枯葉ひとひら水面へと

高橋 由紀子

正成像秋いく度の勇姿かな  
木漏れ日を浴びて石路華やげり  
大いちよう君懐かしき松本楼

志村 良知  
秋光や天蓋をなす大公孫樹  
噴水に手を振る園児秋つらら  
プラタナスめぐる追憶秋の風

内藤 まりこ  
且つて来し日比谷公会堂に暮れの秋  
秋澄むや鶴の噴水明治の香  
石垣にビルに秋空心字池

長尾 進一郎  
陽の差して紅葉浮き立つ幾層倍  
街騒の中の憩ひや秋の園  
さざ波に揺るぐ落葉や心字池

松田 一文字  
秋蝶の花から花へ梯子して  
天高し輝く機影遠ざかる  
秋晴や鳥の声降る姿なく

中村 晃也

小春日の散策傍目には徘徊  
円安の止まらぬ朝つわの花  
ポインセチア日比谷花壇の店頭に

新田 ゆふき  
秋うらら水噴く鶴の雲を呼ぶ  
植ゑ込みの欄干柱鳶葛  
杜鵑草首かけ銀杏守りおり

西川 知世  
ビル建てる音秋雲を急がせる  
秋風や丈を豊かに薔薇の赤  
秋の声煉瓦に刻の色浮かみ

次回は令和四年十二月一日(木)、  
日本倶楽部にて開催予定。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

十二月の兼題「小春」は陽暦では十一月、陰暦の十月に当る。立冬のあと、冬の寒さに向かう前の暖かさの戻る一時。虚子編新歳時記増訂版は私の持つ一番古い歳時記で、初版は昭和九年、昭和

十五年の改訂版を経て四五版のものである。簡略な季語解説が旧文字で書かれていて参考になり、季節が巡ってくるが開く。「小春」を引くと

― 恰度その頃は、荊楚歳時記にも「十月和暖如春」とあるやうに最も氣候の温和な時で、ぼつかりとした好い日が續く、小春日和（こはるびより）といふ。作句の場合は小春或は小春日といつて小春日和を意味する場合が多い。小六月といふのも…小春と同義―

芝原や小春仕事に塗る鳥居

一茶

夕陽（せきよう）の流石に寒し小六月

鬼貫

のびくし帰り詣や小六月

子規

父を恋ふ心小春の日に似たる

虚子

小春日や潮より青き蟹の甲

秋櫻子

玉の如き小春日和を授かりし

松本たかし

憎まるゝ役をふられし小春かな

伊志井 寛

尻高くはね上げ小犬園小春

星野立子

白雲のうしろはるけき小春かな

飯田龍太

泣くたびに臍のふくらむ小春かな

水原春郎

油絵のピエロ跳ねだす小春かな

尾崎よしゑ